

マタイ19章27節以下による説教

昨日、当教会で、オンラインではあったがオープンチャーチを開催することができた。こども食堂やフードパントリー(食材分かち合い)の活動をしておられるゲストのお話をうかがい、みなさんと語り合う機会が与えられた。

自らの所有を分け与える。そのために、力をつくし、多くの時間をささげて実践している人たちがいることを知らされた。キリストが、すべての律法を要約して、神を愛し、隣人を愛しなさいとおっしゃり、隣人とはだれかとたずねる声に「よきサマリア人」のたとえをもって応じ、行って同じようにしなさい、と命じられたことを思い出す。むしろ、信仰者やその指導者が、弱く倒れ伏す者を避けるような礼拝生活をしているときに、信仰をもたない人たちが、近所でイエスの教えにかなう生のあり方を示しておられる。「行って同じようにしなさい」ということばを、私たちは自分と教会への悔い改めへの促しととらえた。

しかし、同時に私たちは、行って同じように実践したい、行いたいと具体的に考えるほどに、イエスに次のように教えられた富める青年の悲しむ姿を自分に重ねずにはおれない。

「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。」 マタイには省略されているが、ルカには、「すべての」持ち物を施せとある。

このことを真摯に受け止めれば受け止めるほど、私には不可能なので、悲しくもなるのである。私は金持ちではない。教会も一時に比べれば、経済的に苦しくなっている。しかし、イエスの言葉をまっすぐ受けとめようとすればするほどに、自らいくらかでも所有していること自体が、私が善いことを行うにあたっての不完全性、矛盾のあらわれだと思われてしかたがない。

私はこれまでも、そして先週までのみことばに向き合いながらも考えてきた。

「いくらかなら分けられるだろうか？」

「できるかぎり分かちあう、ということではかこの教えに応じられないのではないだろうか？」

昨日はまた、ハッとする思いもした。「小学校を卒業したいま、使わなくなったこのランドセルならば、まだきれいだから使ってもらえるかもしれない」、そのように言う娘やその母親のことばを横に聞いている私自身は、自分の買ったばかりの洋服のことを考えることもなかったことに気が付いた。

金銭の所有、私が何かを持っているということ、それ自体がイエスの前では私の信仰者としての生の矛盾として立ち現れるのである。私などよりも献身的に、よりずっと多くのものを他者に分け与え、自分の時間を、近所に住む子供たちや、コロナ禍にあつてますます貧困の度をまし叫ぶ母親たちの声を聞くために捧げている隣人たちの姿から、私は、まずは、自分が分かち合おうとするときに陥ってしまっていたこの矛盾に気づかされた。いや、私たちよりもいっそう働いている人たちこ

そ、もしかすると、この矛盾には悩んできたかもしれない。持てる者が他者のためにどこまで与えることができるのか。けっきょく、徹底的な愛に生きることができない自分に悩むという意味では、正しく他者のために生きようとするすべての者が、この思いを棄てられないのではないだろうか。残念ながら昨日は時間が限られていて、その深い思いまで共有するにはいたらなかった。

この悩み、世の中で恵まれていると見える側が、恵まれていないと見える側に施そうとするときの不完全さや矛盾を、見つめることが大切だと思わされる。

しばしば陥ってしまう私たちの間違いがある。とりわけ、自分が良いことを長くやってきた、今まさにしている、という誇りが生まれ、どこかで「してやっている」という高ぶりにまで心がうわずるとき。私たちはしばしば饒舌になり、分かち合いでなく自己の押し付けとなってしまう矛盾に気づかず、結局本当の意味で所有を明け渡していない。むしろ、与えているようで、自分が得ようとしてしまう。実際、行ってきたことそれ自体は素晴らしいのに、私、私、私はしていると、私の三位一体で完結してしまうことがありうる。

昨日の会で、私にとって特に印象深かったのは、「こどもの居場所作り@府中」で活動しておられるみなさんが、自分が分け与えているという意識や素振りをまったく見せず、この居場所に連ねられていることを通して生かされている、かえって地域のみなさんと一緒にいる場、居場所を与えられている、とおっしゃっていたこと。また、会のあと、個人的にお礼をのべた私に、代表の方が、私たちに必要なのは、お金でも、物資でも、人材ですらなく「仲間」だとおっしゃったこともお伝えしておきたい。人材でなく仲間、施す行為それ自体ではなく、そこで結び合う隣人どうしの信頼関係が、いま一番必要なものだという意味なのだと思ふ。 「ご近助の居場所づくり～コロナ時代のとなりびと」という主題の集会をとおして、今回私たちが知ったのは、この点であった。私たちが求めるべきは、今自分が誰かにあげられるもの、だとか、何か自分にできることでもない。自分、自分、自分ではなく、共にいてくれる隣人であるということ。きっと、あの厳しい言葉を語られたイエスが求めておられたのも、真の意味における神の国の「仲間」だったのではないかと思わされる。あのイエスのまなざしの先には、神がつくろうとしておられる「居場所」がある。誰がその居場所にふさわしいものであるかと考えてみよう。そこに迎えられるかどうか、最後に私たちが問われるのは、何をしたか、ではなく、だれと一緒にいたかということではないか。教会は、まず、何をするにしても、イエスと一緒にいたのかどうか、そうしてイエスに身を委ねる隣人たちの仲間であることができたかどうかを問われるのではないか。

マタイによる福音書19章は、さまざまに解釈され、また実践されてもきた。まっさきに思い浮かぶのは、イエスの教えをそのまま実践しようとした修道士・修道女たちのことである。彼らは、その言葉を実践するために、いわば俗世を棄てた。古代エジプト人コプト教会のアントニウスなどが、イエスの言葉をことごとく実践しようとして、すべてを尽くしたことが知られているが、やはり、その後、マタイ19章を第一の修道会則としたフランシスコ会などの徹底したありようは、教会史上もっとも印象的なみことばの実践例であった。しかし、イエスの教えが会則となった結果、隠者としての修

道士たちの霊性のあり方にしろ、修道会の慈善運動という実践のあり方にしろ、それらを本当に行うことができる者たちは、信仰者の中でもごく少数の者に限られ、まるでマタイ19章をまもることが、聖者の特権のように見なされた点は、問題だったと言わざるをえない。聖者と聖者でない者、塀にかこまれた隠者と世俗世界の人々は、本当の意味でとなりびととなりえるだろうか。「仲間」になったと言えるだろうか。

あわせて16世紀にもなると、大きくなりすぎた修道会の財産の問題が、社会的な格差を大きくする構造の問題とも絡みあっていることが、いよいよ明らかにもなってきた。結局のところ、修道会はお金や所有する宝で満たされ、その外では人が飢え渴いているという矛盾が露呈されてきた。そこで起こった宗教改革の時代には、必然的に、マタイ19章の読み直しも行われ、修道会の財産もまた、宗教改革を導入した共同体の社会福祉の予算とされることになる。ここで言われていることは、個人が外面的な所有の放棄をすれば、それでよい、というものではない、と宗教改革者たちはこぞって主張した。外面的にではなく、人は神以外に「何事にもまして所有したいものはない」という信仰に立つ必要がある。そのうえで、神の御心にしたがって、心を尽くして自分自身のように隣人を愛することが問題である。つまり、神への愛と隣人への愛が問題なのである。しかし、徹底的な意味で、だれもこの教えを順守してこなかったし、どんな人間にもできない。イエスは、私たちに「与える」という善行のわざにむかせようとしておられるのではない。イエスは、この律法の、罪を認めさせる効用を意識して教育しようとなさっているのだ。つまり、人々を「義という賜物、主から与えられるもの」に気づかせるために、徹底的な律法をつきつけられているのだ。ルターはこの意味で、ここでも、良い行いではなく、信仰によって、イエスの救いへの信頼と確信へと立ち帰る悔い改めによって、義とされるという信仰義認の教理をといた。

ルターはしかし、マタイ19章の解説において、少し語りすぎているところもあったことを、私たちは、プロテスタント教会に属する者として注意しておく必要があるかもしれない。いま述べたような理由から、ルターは、いわば自分の持ち物を売らないでも、本質的にマタイ19章の悔い改めの生を全うする道を考えて。もちろん、自分の所有にすがりつくというのは、この信仰からはありえないが、修道士のように、すべての自分の所有を明け渡して他人の財産によって生きるのではなく、自分が持っている所有をまもり保持し、管理して、それをこの世界の市民としてどのように用いるかが問われるのだ、と考えたのであった。ルターだけではなく、宗教改革者たちの多くはそう考えていたので、宗教改革は、ときに、資本主義的な財産の所有を肯定する道に教会を開いたときえ評価される。富めるものは、自分自身の所有物でもって、自分に属するものたちの世話をする。富をことごとく手放さなければならない場合というのは、それをもって告白的な姿勢が問われるときに限る。これを、信仰の命令とまでとらえたプロテスタントの資本家たちの姿を、私たちは、歴史のなかでいくつも見出すことができる。これらの解釈は、福音書のイエスの言葉をまっすぐに読むときは正反対の結論へと導いているようにさえ思われる。イエスは施せと言われたのに、宗教改革者は保持して管理せよ、と言ったのだから。

このようにマタイ 19 章の解釈の歴史を(ウルツ註解書を参照しつつ)すこしだけ顧みるだけでも、

私たちは、教会が、「針の穴を大幅に拡大し」て、結局金持ちのために天国に入る道を拓いているのではないかと、という指摘が当たっている面もあると言わざるをえない。これは、ウルツという人の註解書に引用されていたエルンスト・ブロッホの言葉である。「教会は、針の穴を大幅に拡大し」ているのではないかと。この指摘を、私たちは改めて考えて見なければならぬと思う。私たちのオープンチャーチの結論からすると、私たちはもう一度、隣人を求めて金銭とか所有について、あらためてイエスのまなざしをうけとめ、御言葉にまっすぐむきあって、他者のために所有を手放すことのできない不可能性を真摯にうけとめ、しかしごまかすことなく打ち砕かれた生の場所に立つ必要があるのではないだろうか。施せ、ということばは最初期の修道士たちのように文字通りに受け止めつつ、しかも宗教改革者たちのように、それを心からの悔い改めの思いをもってキリストのみに立ち帰るよう促すみ教えだと理解する。私たちには不可能なこの道を、神には何でもできると信じて求めていくしかないのではないかと。

今日お読みした箇所、ペトロが言ったことばを、イエスがさげすみ、否定しないどころか、そのまま肯定的に受け止めておられることは、私には最初、大変意外だった。ペトロは、「このとおり、私たちは何もかも棄ててあなたに従って参りました。では、私たちは何をいただけるのでしょうか」と言う。この言葉は、自分はすべてを棄てたということを誇っているように聞こえないだろうか。しかも、自分の所有は放棄したといいながら、その行為の報いを求めている。「何をいただけるのでしょうか」と。別の箇所、王となられるイエスに従ったなら、その隣の座に坐して、来るべき神の国で高い位をあたえられる、そう政治的に期待して、イエスに叱責された弟子の姿が伝えられていたことも、頭によぎる。

しかし、イエスはここでのペトロを叱責するどころか、そこで、そのまま肯定なさる。なぜだろうか。ペトロの言葉に対する私たちの誤解は、どのような点にあるのだろうか。私にはこの一週間、この流れが理解できないことが説教者として悩みであったが、オープンチャーチ後、そこで学んだことを振り返る今朝になって、すこし分かったような思いもした。つまり、「何をいただけるのでしょうか」というペトロの素朴な問いに込められた、「私はイエスを前に、自分から何かを与える立ち場がない、むしろ受ける立ち場にある」という本質的な理解、そのうえで、「イエスの御前というこの居場所にあっては、私の命に関わる良いものがきっと与えられる」という幼子のようなこの期待をもっていること、これを、イエスは肯定なさったのではないかと。自分は与えているのではない、むしろ受けているのだ、とは、私などより多くのものを与え、長い人生の時間を割いておられたことも食堂の奉仕者皆さんの言葉だった。

やはり問題は、今何をしたか、ではなく、今だれと一緒にいるか、なのではないか。再度の確認になるが、イエスの言葉に本当に従っているものは、やはり自分が何をしたかではなく、イエスが一緒にいて何をしてくださるかどうかを一番に求め考えるのだ。何をするにしても、神と一緒にいてくださるか、イエスが一緒にいてくださるかが問題なのである。では、イエスが目に見える形でこの地上におられない今、私たちは誰と一緒にいることで、イエスと一緒にいることになるのか。

イエスは、私はあなたと一緒にいる、というペトロの言葉を肯定しつつ、こう言われた。「はっきり言うておく。新しい世界になり、人の子が栄光の座に座るとき、あなたがたも、私に従ってきたのだから、十二の座に座ってイスラエルの十二部族をおさめることになる。私のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子ども、畑を棄てた者は見な、その百倍もの報いを受け、永遠の命を受け継ぐ。」

「はっきり言うておく。」＝「アーメン、私はあなたがたに言う」。あの重要なことを宣言されるときにイエスの決まり文句が響き渡る。幼子を神の国に最もふさわしいものと呼ばれたときに語られた言葉と同じである。「人の子とが栄光の座に座るとき」、その傍に居るのはあなたたちだ。ここで語られる言葉はやはり、終わりの日に決定的なことは、やはりイエスに従いと一緒にいたという事実であることを示している。イエスと一緒にいるものは、イスラエルの十二部族のまんなか、つまり神の国の全住民と共にいるものとされるだろう。

ここで、邦訳では分かりにくいかもしれないが、じつは終わりの日の「裁き」が問題になっていることに注目したい。「十二部族をおさめる」とあるが、直訳すると「十二部族をさばく」という言葉。十二部族とはここでイスラエル全体のことをあらわすが、ペトロ相手に、彼を代表して語られているところを見ると、新しいイスラエルとしての教会の裁きがいわれている、と考えるべきだろう。この世にあってイエスと共にいる、と告白してきた者たちが、終わりの日、「羊と山羊」の分けられるさばきの場面にあって、そこでこそ、イエスの傍に居ることをゆるされるというのが本旨なのである。イエスの言葉には、あいかわらずの鋭さと緊張がある。私たちはその緊張の中で、あらためて自問する。それほど決定的なことであるならば、何としても今、イエスと共に、イエスのおそばにいたい。では、今の時代にこの世にあって、私たちがイエスと共にいるというのは、どのようなあり方の中でだと言えるのか、これこそが問題である。単に、身内をすてて、財産をすてることが答えではないということはわかった。単に教会組織に所属すること、洗礼を受けていることを言うのでもないのだろう。では、今、私たちにとって、だれと一緒にどこに居ることが問題なのだろうか。

ここで、この箇所と同じように、終わりの日のさばきの場面について語るマタイ25章を引いておきたい。25章31節以下である。

「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、羊を右に、山羊を左に置く。」キリストと共にいた側が羊、そうでない側が山羊。その裁きの場面である。19章と違い、イスラエル12部族あるいは教会だけでなく、より広い視野で「すべての国の民」の裁きが問題とされていることは、この箇所に際立つ点である。そのような場面であって、イエスと共に居る者とはだれだと言われているのだろうか。続きに耳を傾けよう。

「そこで、王は右側に居る人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えているときに

食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気の時に見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたのでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたのでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたのでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

……そしてイエスが、左側にいる人たちには、反対の指摘をなされたことは、皆さんもご存知のとおりである。

ここで、際立っていることは、正しい人は、イエスの兄弟である最も小さい者の一人と共にいたときに、イエスと共にいたとみなされていることである。私たちは、この世にあって、イエスに従う道を探すのであれば、イエスの兄弟である最も小さい者たちのところにいかなければならない。私たちが隣人を求めるのは、イエスを求めるからであって、イエスを求める者は、小さな者たちの居場所に行くのである。ひるがえって、19章で、裁きの言及にともない29節で言われていたことに耳を傾けよう。

「わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子ども、畑を捨てた者は皆、その百倍もの報いを受け、永遠の命を受け継ぐ。」

あの富める若者が求めた「永遠の命を受け継ぐ」ために必要なことについて、ここでは言葉をかえて表現される。持てる者を捨てるだけではない。持てる関係をすてても、貧しい者たちと共にいることのできる居場所に入っていくとき、その者はイエスの命に与かるものとされるのだ、というのである。兄弟姉妹はおろか、両親も、子供まで捨てるという表現には、何か非人道的な響き、ある冷淡さを感じる人がいるかもしれない。しかしそれは誤解である。最も弱い者と共にいることを選ぶために、それを阻むものがもし最も近いものであるとするなら、つまり、最も近い者たちが貧しい者を退け、自分たちの所有にすぎることを主張し、神の御心とは違う道に私たちを引っ張っていくとするならば、ふつう私たちは自分たちの身内の利益を選びとるのだけれども、イエスはその利益を享受した家には共におられない、もっと必要な場所に、イエスは先立って行っておられる、ということである。その場合、私たちが優先する側は、イエスが優先する側とは逆になる。たとえば、この世にあってはそちらの方が豊かで、幸せで、祝福されているように見えたとしても、それは富の力によるものであって、イエスが共におられることの印ではない、ということになる。だから、もしイエスを求めるのであれば、イエスのみことばを最も必要とし、その癒しを求め、救いを求め、叫び、うめき、飢え渇いて倒れ伏し、自由を失いこの世の条件に拘束され、あるいは隔離され疎外され、孤独のうちに悩みの絶えない真っ暗な場所から、優先的に訪ねてみななければならない。イエスは、後になれば確かに、豊かな家にまったく来ないともいえないが、確実なことは、まず真っ先に、病人ものとへ駆けつける医者のように、小さな者のもとに駆け付け、共におられる方なのである。

そのイエスにしたがい、イエスの名のために、やはり小さな者たちと共にいきる者たちは、だれよりも先にイエスの救いの命を知るものとされる。永遠の命にとらえられ、驚く者たちの居場所は、この世の権力者の家や都市の真ん中ではなく、この世にあって最も暗かった、城壁の外の、ゴルゴタのような、墓場のような場所である。

読み飛ばしていたが、今日の箇所でも重要な言葉に「新しい世界」という言葉がある。これは、確かに終わりの日の社会、新しい世界という意味領域に開かれている言葉ではあるが、第一義的には「再生」という意味の言葉である。それは、何よりも、死者の復活に生かされたあり方を意味している。イエスと共にゴルゴタに立つ死すべき小さなものたちは、誰より先に、そこが、よみがえりの命に生かされる生の居場所となる奇跡を目の当りにするだろう。そこには、イエスのために捨てたすべてのものを百倍にしたと言えるほどの「報い」がある。その報いには、捨てたものの回復、という意味もあるかもしれない。つまり、あらためて、そこからあなたの兄弟姉妹、両親、子ども、そして、共に働き生きる場所とその場所における実りもまた、回復されると約束されていると考えられる。百倍がえし、施されたら施しかえす、あるドラマで流行りとなった、これらの表現は、もともと聖書の言葉であった。しかし、その意味は違う。ここで問題となっているのは、恨みが果たされるカタルシスとはほどとおく、また、善行に対するお返しという意味でもない。ふさわしくない者たちに約束された、神からの命百倍の報いであって、主にしたがう人生への最高の報酬のことである。

この神の報いとしての永遠の命を真っ先に受け継ぐのは、ここでのペトロのように、ただそれだけを求める生にすべてを尽くし、ただ主からいただけるものをいただける居場所を探し求め、ついには見出した人たちである。人生の努力が報われた、わたしの良いわざは報われるはずだと言って、この世を先頭に立ってけん引しているような富める青年をはじめ、多くの者たちではない。

「先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる。」

マタイは、「多くの者」という言葉を他の福音書にもまして強調している。それは、ペトロがけっして聖人でなく、ここで十二部族のただなかで裁きの座にイエスと共に立つ者たちが、使徒に限定されるわけではないからである。まさきに裁きの座で喜びのうたをうたう者たちが、ほかにも多くいる。私たちは、どうだろうか。先にいるのか、後にいるのか。先にいる、と断言して饒舌になる者は注意した方がよい。後にいる、と断言して希望を損なうものも注意したほうがよい。私たちは、自分の十字架を背負い、ただイエスと共にいる居場所をさがし求めたい。そのために、この社会にあって、いま一緒にいるべき隣人を探そう。あなたの隣人とはだれか、良きサマリア人のたとえなどを思い出しながら、私の隣人を求めてこの一週も歩み出そう。助け助けられる、仕え仕えられる信頼の関係が結ばれる場所に、そのような二人・または三人が集まる場所に、まことのイスラエル、真の教会、そしてまことの神の国が実現し、主イエス・キリストはその只中に共にいてくださると信じつつ。